

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱承認
昭和二十四年七月一日發行

第十五卷 第七號

浄土

七月號

「死の問題」特集

白 罌 粟 吉田絃二郎

佛を缺いた法 眞野正順

1949

7

死の苦しみ

明治文壇の巨匠正岡子規の晩年は實に闘病そのものの生活だつた。左右の肺が殆ど空洞と化し、而も腹背の肉は腐り漏穴が次々に口を開いてくる。まことに生き乍らの地獄の苦しみのさ中にあつて、床上、なお「ホトトギス」を主幹し、新聞の選句をし、文學を論じ、隨筆をものす。その子規の日記の一節に、高まり來たつた病苦に耐えかね、家人の不在を啣つて

「……次の間へ行けば剃刀があることは分つて居る。その剃刀さへあれば咽喉を掻く位はわけではないが、悲しいことには今は匍匐ふことも出來ぬ。已むなくんば此小刀でもど笛を切斷出來ぬことはあるまい。雖で心臓に穴をあけても死ぬるに違いないが、長く苦しんでは困るから穴を三つか四つあけたら直に死ぬるであろうかと色々に考えて見ると、實は恐ろしさが勝つので、それと決心することも出來ぬ。死は恐ろしくはないのであるが、苦が恐ろしいのだ。病苦でさへ堪えきれぬ。此處に死にそこなうてはと思ふのが恐ろしい。」と書いてゐる。

平常、死を論じ、死についていろいろと考へてみはするが、それはいづれもひとごとのようなものだ。死を目前にひかえての心になることはむずかしい。先人の死についての偽らぬ告白をかみしめて味うことが大切だと思ふ。

目次

死の問題

佛教と死	佐藤密雄(4)
死の追放	中村康隆(15)
現代人と死	佐藤賢順(10)
死と俗信	吉田宣成(18)

白 罌 粟	吉田絃二郎(1)
-------	----------

佛を缺いた法	眞野正順(21)
--------	----------

かの子と觀音像	岩瀬久美子(7)
---------	----------

後ろ姿	高瀬 礪(13)
-----	----------

餘 裕	町田トシヨ(14)
-----	-----------

枇杷熟れて	竹原教圓(14)
-------	----------

お 念 佛	村田嘉久子(7)
-------	----------

芝園だより



白 け 栗

吉田 絃二郎

今から六七十年も前の話である。わたくしの父が四五十歳のころのことである。

わたくしの父は故郷を去つて、二十一里ばかり西方の或る町へ移つて行つた。數年の間故郷へも立ち寄らなかつた。

或る時父は幾年振りかで故郷にかへつて行つた。そこには父が親しくしてゐた半藏老が待つてゐた。半藏老はわたくしの父とは幾歳もちがはぬ年輩の男であつたが、若い頃から長者の風があり、村の人たちは尊敬の意味で半藏老と呼んでゐた。

久し振りで村に歸つて行つたわたくしの父を見るや半藏老は相擁かんばかりにしてよろこび迎へてくれた。そしてわたくしの父が數日後ふたゝび故郷を立つことになつた時は、名残りを惜しんで村境まで見送つて來た。さていよいよ村境で別れるとなると、さらに西の方三里の城下町までいつしよに歩いて來た。まだ汽車は無論のこと、馬車もな

ないころのことである。

城下町で別るゝつもりであつたが、いざとなると半藏老は「いや、もうすこし送つて行きます」といつてたうとう二十里ちかくの道を見送つてくれた。

草鞋を替へたことも一度や二度はあつたであらう。

日も暮れかゝつて來た。そこから一里あまりの山路一つ越ゆればわたくしの父の家である。

ところが半藏老はそこまで來ると俄に「名残りは盡きぬが、これでお別れをする」と言ひ出した。

「この山一つ越ゆればわたしの家です。ぜひ泊つて行つて下さい」と父は言つた。

すると半藏老は「あなたの家に泊つたのでは、あなたを見送つたことにはならない」と言つて、引き留められた袂を振り切るやうにして、さつさと夕暮れの道を訣れて東の方へ二十里の道を歩いて歸つた。

わたくしがまだ小ひさかつたか、或ひは生まれてゐなか

つたころの話で、父の死後、姉たちからよくその話を聴かされたものである。

つくづく昔の人は情が深く、こまやかであつたと思ふ。

その半藏老の後継ぎの息子といふ人も父に似て近在での篤農家である。部落十數戸の農家の部落長をつとめてゐるが、率先して闇賣りを絶対にしないことを申し合はせ、嚴に實行しつゞけてゐる。したがつてかつては裕福であつたが近ごろは小作農などよりも活計は苦しく、女學校に通つてゐる娘たちは、月々の學資を稼ぐために毎夜十二時まで薬を打ち、繩を縛うてゐるといふことである。二三年前、滿洲にゐた長男夫婦と二人の孫と四人の遺骨が送られて來た時はかれは男泣きに泣いた。

かよといふ小母さんのことについてはすでに書いたこともあり、五十年前のことだが、今でも忘れ得ない。

小學校を出た年の春、わたくしは佐賀の城下から西へ二里はなれた迎町といふ、二十戸ばかりの部落の農家へあづけられ、そこから毎日城下の學校へ通つてゐた。

夏冬とも朝八時の稽古始めだつたので、冬などは眞つ暗な中に起き、星の光りを仰いで流れの水で顔を洗ひ、二十町ばかり歩いたところで夜が白々と明けた。

おかよさんは士族の娘で色の白い、品のいゝ小母さんであつた。朝は眞つ暗なうちから土間の竈の火を焚いて食事の支度をしてくれた。

いつも寂しい柔和な眼をしてゐたが、或る雪の日わたくしが學校から歸つて行くと、おかよさんは冷たい流れの中に膝まではいつて探し物をしてゐた。問うて見たら「あなたの象牙の箸を水の中に落しましたので」といふことであつた。

あの雪の日のおかよさんの、すまなさうにわたくしを見てゐたやさしい眼は五十年の今日なほわたくしに、人間の心の美しさ、ありがたさを感じさせる。何と言つても昔の人の心はやさしかつた。

白根と淺間に挟まれて六里ヶ原の高原が横たはつてゐる。一筋の細徑が數里の間、草の原を貫いてわびしげに霧の中に消えて行く。

眺むれど草、眺むれど雲數里の間人影とでもない。秋になれば淺間葡萄をもとめて熊が姿をあらはすといはれる。その六里ヶ原でわたくしは上州草津の方から信州沓掛の方へ急ぐ老遍路と出會つた。わたくしの妻は「御報謝」といつておひねりをさゝげた。

わたくしたちは南北に別れて行つた。振りかへつて見ると老遍路はわたくしたちの姿が芒の原にかくれてしまふまで合掌をつゞけてゐた。

拜む者、拜まるゝ者をつゝんで秋の風が吹いてゐた。人生は遍路の旅である。そして西に行く者と、東に行く者とが利那的に遭ひ、永劫に別れて行く時、かれ等は皆な佛のごとく尊く、佛のごとく静かである。

あの日の老遍路もおそらく今は地下に眠つてゐるであらう。わたくしの妻も地下に眠つてゐる。

あれから二十年の秋が來、秋が去り、今年も亦やがて秋の風が吹くであらう。

人生は寂しくもあるが尊い。

榛の花や枸杞の花やエゴの花が咲きはじめた。野苺の花が咲くやうになつた。

つぐみや三光鳥が來鳴くやうになつた。

修善寺から箱根を越えて東京に歸つた日、湖畔の木立でとらつぐみが啼いてゐたことを思ひ出す。その時いつしよにとらつぐみを聽いてゐた妻も故人になつてしまつた。

母が亡くなつたをり三人の姉たちは綿帽子を被ぎ、泣きながら柩について山路を歩いて行つた。暮れて間もない空には星がまたゝき、草の中には、ばら撒かれたやうに野苺の花が咲いてゐた。その後野苺の花を見ると母を野邊送りした夕暮れのことを思つたが、今は三人の姉たちも歿なつてしまつた。野苺の咲くころになれば、白い綿帽子を冠つて歩いてゐた三人の姉たちをも思ふやうになつた。

多磨の田圃には今年もたゞ一羽の白鷺が下りてゐる。去年も去々年もあの一羽の白鷺は、青田のころになれば孤獨な姿を見せたものであつたが。

あの白鷺は妻を失つたのであらうか。

田圃に下りて、首をながくしてあたりをながめてゐる姿は、歸り來ぬ妻を待つてゐるやうにもおもはれていぢらしい。

野苺の花を見てはわたくしが亡くなつた母や三人の姉たちを憶ふやうに、孤獨な白鷺も亦多磨の田圃に葦の葉のそよぐころになれば歸り來ぬ妻を思ふのであらうか。

今年五月の二十日ころはじめて三光鳥の聲を聽いた。いつの年も夏になれば待たるゝ鳥であるが、この冬庭の櫛

の枝をおろしたので、今年は、三光鳥の來鳴くこともすくなくなるのではないかと思ふと寂しい。一時は三光鳥の鳴く音を聽けば、病床に眠つてゐた故人のことを想ひ起こすので、耐らなくなつて來たが、この頃ではやつぱり青葉蔭に三光鳥の音を聽かなければ物足りないやうな氣がする。

一愁に住するものは愁をあるじとし、徒然に住するものは

つれづれを主とす」といふ古人の言葉を思ふ。まことに「さびしさなくばうかるべし」である。

榛の花、エゴの花の姿を見てもさびしさこそあれよろこびとてはない。

麥秋の野に鵲の鳴く聲もさびしく

水をかすめて飛び鳴く翡翠の聲もさびしく

初夏の青空を徂來する白雲もさびしく

草の原にたゆたふ一筋の道もさびしく

草を喰む山羊の眼もさびしければこそわが心を惹く。

さびしければこそ飛鳥の佛たちは尊い。

いつであつたらう。まだわたくしが病んでゐるところであつた。

妹が訪ねて來て老いの手に鋏を握つて畑の片隅に種子を播いてくれた。

わたくしは何の種子であるかも知らなかつた。

今朝、畑に出て見たら雪のやうに白い罌粟の花が咲いてゐた。

わたくしはかつて大和遍路のをり夢殿のほとりで見た白罌粟をおもひ出した。

わたくしは瞑默して合掌した。

大和の寺々で拜んだ佛たちへ。

そして老いたる妹のために。

佛 教 の 死

佐 藤 密 雄

岸老人に櫻並木で行會つた。「御元氣で何よりです」と挨拶をした。「やあ、まだ業がつきなので、あくせくして居ます」と言はれ、戸迷つた私は「なるほど」と言つてしまつた。幸ひ老人は私の言葉なぞ氣にもせず別れたが、考へて見ると、「なるほど」はまづい應答であつたと思ふ。

若葉が出初め、風のまにまに、未だ花の残りのあつたことを知らせる様に、ひらひらと花びらの散り舞ふ所で、あたりものどかであつたし、公安委員の老人殿も、朝の九時と言ふのに、杖を引く散歩らしい。「あくせく」と言はれる風情は全くなかつたのである。

「あくせく」して居たのは私であつた。「佛教から見た死」と言ふ題で何か書く様にと命ぜられて居つた。期日が迫つて催足を受けたので、安易に片付けやうと思ひ、「御知慧拜借」のつもりで百科辭典を見、佛教大辭典を見たが、「死」と言ふ項目はあつたが、どう書かへても讀物にはならない。それで、清澤先生の骸骨講義から拜借しやうとして見たが、生死を超越することはあつても、私の望むやうに

死を論じた所がない。そこでは、「は」と漸くに氣付いたのであるが、佛教は生死解脱の宗教で、死が問題にならなくなるのである。「なるほど」御經の中には、ほとんど死と言ふ字が見つからないし、何よりも永く佛教を講じて來た私自身が、「死」の書き様がなくて困つて居ることが此を證明しているのである。何んたる「うかつ」なことであらうか。とんでもないことを引受けたものである。期限の迫つた今日、斷ることも出來ず、頭の中が「あくせく」せざるを得なかつたのである。私は考もなくものを引受ける一そこつ一な所があるが、性來氣の弱いたちである。用事をしても落着がない。「何とかせねばならぬ」とあせる氣を紛らさうと、新聞を見たり雑誌を取り上げたりすると、驚いたことに、「死」にかゝはることばかり書いてある。何たることであらうか、佛教に死なく世間に死ありである。こんな具合で「あくせく」して居た折から、岸老人に一業がつきずあくせくして居ます」とやられたので思はず一成る程」と失禮な感歎をしてしまつたのである。

私が「業がつきる」ときいて「なる程」と言つたのは、一老人は早く死ぬべきだ」と言ふ意味を肯いたのではない。一世間で言ふ死一とは、佛教で言へば業のつきることだと感じ入つたのである。佛教を勉強して居る筈の私が、それに氣付かなかつたとは、「なるほど」紺屋の白ばかまである。私は挨拶となると昔から下手である。かつて一突然御無沙汰致しました」と言つて相手を當惑させ、「失禮致しました」と言ひ直しても、つじつまが合はなかつたことがある。今度も老人に失禮する氣は全くなく、感謝して極めて率直に、「なるほど」と言つたのである。

死とはたしかに業がつきることである。此の業とは業果であつて、持つて生れたものを使ひはたすことである。

大體出生と言ふことは人が「生れた一のか、親が一産んだ一のか、何ちらであらうか。親が生産したものなら、生産された人は、偶然に生産された作品であるし、「生れた」のなら、親と言ふ縁を借りて、自分で出生して來たのである。これは同じことの様で、大變な意味の違ひがある。そして佛教は「生れた一」とする考へ方である。だから、産んだ親も、生れた子も自分の製作品とは見ず子の生命に對しては親と對等な生命人格を認める。子も亦、自分の顔や體格の良否、生國環境の好惡について、此を親の製作技術の上手下手に依るものとして、親に責任を問ふ様なことをしない。自業自得として、何等の疑問を持たない。此れは自分で生れ來たと考へて居るからである。そして、その人の生涯の成功不成功は生れてからの努力如何だとする。凡そ人間は不惑の年を越えようと、省みて自己の過去の不明を残念がるが、此れを原稿の書換えの様にやり直しが出來ず、自業自得とせざるを得ないのである。すべては自分で築い

た人生だからである。此の意味で考へると、持つて生れた五十年若しくは八十年使える身心や環境も自業自得のもので、新生以前に積んだ効果で、新生涯を初める資本だつたとせねばならない。此の資本が過去世の業果で、此れを使ひ切る時が一業果がつきた時」で、所謂死である。持つて生れた資本は、使ひ方は自由である。然し、來世の資本を作る現在の資本である。資本がつきる迄に、有効に、らん費をつゝしんで、來世の巨大な資本を産出する効果を上げねばならない。なまけたり、自殺したりすることは許されない。

三

原稿は書き換えることが出来るが、人生は初まつたら後戻りが出來ない。後悔先きに立たずである。一度初めたらそれに責任を持たねばならない。此が業のきまりである。借金したら、それに縛られ、約束に依つて返さねばならない。業の束縛である。

強い體と良い頭で、何の學校へ入らうと自由であるが、入學したら其のすべては求めた學業に束縛される。同様に人は、自分で始めた生活であるが、生活の進むにつれて、夫婦・家庭・友人・社會の關係を生じ、事業や識見を持つにつれて愈々責任を負はねばならぬ。大なる發展は大なる責任を持つことであつて、無數の關係に縛られる。地位・人格・名望と言ふものは、荷負つて居る責任、現在業の重さだと言へる。そして、此の責任と其の果し具合が清算されるのが、「業のつきた」死の時である。棺をおふて功罪定まると言はれる様に、死と共に、現在身を縛つて居た責任

は清算され、差別して出た効果が、次の新生涯の基盤を持つて生れる資本となるのである。死とは一生涯の努力の總計算をば受取つて、あらためて自由に新生を始めることである。又、新生の資本として受取つたものが黒白いづれであつても、新生涯で白を黒に生かさうと、黒を白に生かさうと、それは自由である。

然し、此れは生死流轉と言ふことをば業のきまりで眺めたのであつて、佛教の求める生き方は、念々に死して念々に生きるのである。五十年の死を待たず、日々刻々を業をつくして生きるのである。與えられた五十年の身心を自分のものとせず、佛に捧げるのである。死んだとするのである。生きねばならない身心を、自分が生きず、佛が生かすとするのである。然し、身心には感情があり私慾があつて、捧げ切れない。業果は煩惱の根である。「死んだつもりで」と考へても、身心を生かすには利益を求め、生存のためにかいをせねばならない。身心を生かす爲めに死するとか死こそ生であるとか、考へられても、事實としては不可能の様である。だが然し、たゞ生きつゞけて居ても、死は必定で、然もいつ来るか判らない。今後五十年の生涯を豫定して、若し三十年で死に見舞はれては困る。出来ることなら、此の目の黒い間に死も片附けられたら、安心して業を盡せるのである。そんな不可思議は成立つだらうか。

身心健在の間に死を片附けることは、奇人の生葬式では成立しない。法然上人は念死念佛せよと仰せられた。念佛は死の後方へ永遠に生きること、其の爲めに死を念ぜよ

と仰せられた。古徳は、此れについて「千丈のがけから死の谷へ落ちつゝあると思へ」と解釋された。又、今日限りの命だが、此れで死んでもよいと言ふ一業を盡した一日を送れとも教へられる。筆者には未だ念佛の功が足りず、此のことは出来て居ないが、上人や古徳の言に誤なしと信じて居る。

死と宗教

今の人は死をどの程度恐れているだらうか。誰も生れた以上一度は死ななければならぬことを知つてゐるし、死んだ後ち俺はどこへ行くのだらうと悩む者も先づ無い。死に關する悩みは、死の瞬間は恐しく或は苦痛でないか、或は死んだ後ち自分の親しい者が困りはせぬか、もう少し自分は生前によい事が出来たのではないかと云ふのが、現代人の主なる悩みでなからうか。勿論身心共に衰弱しきつた死の寸前には心理状態も變るかも知れないが宗教は生ける者の精神生活であるからには、宗教は死と本質的にあまり關係がないのが當然である。そして生の力を如何にしたら正しく用ふことが出来るかが宗教の中心目的であらねばならない。こう云ふと淨宗は古いと早合點なざる若い方があるかも知れぬが、よく研究してみると本宗の念佛は生死を通じて正しく生きるための念佛である。今更ら慌てる必要はない。(松濤誠簾)

お念仏

村田嘉久子

思念の力と言うことをよく言いますが、本當かしらと疑つておりました。相手を憎惡の眼をもつて見つめると、相手も何かしら憎しみの氣持が起るとみえて、こわい眼で睨みかえす、また此方が優しい氣持で相手にのぞめば、かならず相手も微笑をもつて對して来る、と聞かされたことがありますが、そのときも私は半信半疑でおりました。

つい先日、鎌倉から東京への省線で、私はそれは非常に混んでいる車に乗りあわせてしまいました。その時のことなのです。身動きも出来ないで吊り皮にしがみついていますと、丁度私の前の腰掛けに年の頃六十餘りでせうか、小柄な老紳士が席を占めているのです。身についたこげ茶の洋服の着こなし、中折の下に覗かれる髪も白く、フチ無しの眼鏡をかけて、小柄ではあるが仲々立派な紳士で、何の學者か、博士かと思はれました。ところでその紳士は何處から乗られたのか知れませんが、もうマドロスパイプを手にして、スバリ／＼と紫煙を漂わせているのです。その煙がまた丁度其上の吊り皮にぶら下つている私の眞正面下からフワ／＼と、顔にかゝつてきます。折あしく風邪氣味の私、そおでなくても咳になやまされているのに、一層烈しくせきこんでくるのをどう

かの子と觀音像

岩瀬久美子

『ある夜かの子は悲憤極まる面持で、お守りにしてゐた觀音像を袋ごと紫檀の机に向つて發止と投げつけた。私は驚いて「どうしたのか？」と聞いた。かの子は「ええ、もう済んだの。心配しないで」とニコ／＼しながら答へた。』と一平は書いてゐます。

かの子は先づ人間をつくり上げてから小説を書き出した人であると云はれてゐます。

結婚生活の初期に味はつた人生苦、生活苦はかの子を「もし男ならば大僧正だ」と云はれる程の立派な佛教研究家に作り上げたのでした。しかしもともとかの子は頭の髪の手から足の爪先まで藝術家でありました。百花園の園深く典雅に咲いた九條武子夫人と宗教的體得に於て一致してゐたかの子は隨筆集の中で、武子夫人の魂の境地を解明し、夫人の女性にふさわしい個性開顯を羨望に近い迄に讚美して居りますが、しかしかの子自身は同じ佛教婦人でありながら、つまましい白道を武子夫人と共に進んで行くといふことが出来なかつたのです。かの子は佛神の證智に導かれんが爲に一方の手をミューズの女神に導かれんが爲に他方の手を各々反對の方向に引つば

にもできません。舞臺人は平常マスクをかけてはいけないと、醫師から言われてから、私は餘程のときでなければ使つたことがないのですが、この時ばかりはつくづくマスクが欲しいと思つたほど苦しい思ひでした。吸うとゆうよりはふかすとゆうのでせうか、チャックのついた袋を出しては詰めかえて、スバ／＼と、その煙の盛んなこと、眞前の私の咳が出るのも氣附いてかどおか、そんなことは平氣な顔なのです。

何時でしたか、矢張り鎌倉からの電車の中で、乗務員の人が「車内の皆様、お好きな方には誠にお氣の毒でございますが、車内での喫煙は不可ないことになつておりますから、お互様の御迷惑ゆゑ、煙草は御遠慮下さい」と、いとも丁寧に言つていたことがありました。こんなとき、あの様な係りの人が來てはくれないものかと思いました。私は咳と煙に苦しみながらも、あたりの人が一體どんな顔をしているかと、そつと見廻しますと、その紳士の右隣りの人は苦々し氣に紳士をきつい眼付きで見えています。左隣りの人は、これはもうどおにもし様がない。それにしてもよく煙が出るものだ、といったような諦め顔をして、スバ／＼と煙の出るパイプを見つめています。も一つ隣りの人はうるさそうに煙を避けています。立つてゐる近くの人たちも、みな色々の眼でその紳士を眺めているのがよく分ります。しかし當の御本人は一向平氣、それこそ一人役者といった調子です。パイプに煙草をつめては吸い、吸つてはつめ、止めどない様子です。身動きできるなら、身體をかわしたいのですが、こお混んでる車内ではそれもならず、煙がモワモワと舞ひ上つてくる毎に、首を

られながら矛盾相剋する尊い寶を二つも抱えて、際どいところを上手に綱渡りして行きました。相反する二つのものゝ激しい争闘を内に秘めたかの子の胸はどんなに傷み苦しんだことでありませう。さうして遂に小乗觀音の冷たい體は「邪魔だ」とばかりに發止と投げつけられてしまひ、大乘觀音、かの子がふつくらと牡丹の花の様に花咲き出でたのです。多面的性格を持つてゐた自分自身を救ふ爲にも、かの子は、人間性の複雑化に伴ふ「煩惱熾烈」といふ人間進化の形相を賢くも諦感し、それに應ずる大乘の教への必要を出張しました。かの子の偉大性はこの現象世界を一手にまるめて好きな様に翻弄することとかの子に要求してやまなかつたからなのです。

「宗教は人間性の質の變化である。藝術は人間性の量、形の擴大である。どちらもおろそかにしてはなりません。」

「宗教と藝術」といふ論文に於てかの子はこの様な意味のことを書いてゐます。

丁度、この問題で永いこと悩まされてゐた私はこれを読んだ時、その頁の上に思はず涙を落して「かの子女史は親切なをばさんだナア」と叫んでしまひました。誠に何かの子程富麗麗に成長した女性に日本の文學界に恐らくあとにも先にもないでせう。私は、もしファスト的人間を女性に移し植えたならこうもあらうといふその典

左右に振つてゐるより他に仕方がなかつたのです。

其時私はふとこんな事を考へたのです。この方はこんなにパイプを口から放さない處を見ると中毒に違いない、只パイプを見つめて煙だけスバ／＼出して人の迷惑をちつとも考へない、こういう人が不意に倒れるような病氣をするのではないかしら、と考へたら、今迄憎かつたその紳士が、氣の毒になつて思はず、御十念を唱へたのです。勿論口へ出してではありませんが心の中で阿彌陀様の眉間の白毫をじつと拜してそれから一心に御十念を唱へました。すると不思議の事に、今まで誰れがどう見ようと私がいくら咳をしようと、平然とパイプをくわえていたその紳士が、何と思つたか初めて上眼使ひに私の顔をじいつと見上げたので、私は思はずふつと可笑しくなつてしまつたのです。笑う譯には行きませんが唇のあたりがピク／＼して、私はそれをまぎらそうと、一生懸命窓外の景色を見ている振りをしていました。處でその紳士はこれ又不思議な事に今まで決して手から放さなかつた煙の出ているマドロスパイプの灰をビンのやふなものでかき出して、あとをハンケチで丁寧に拭い取ると、ポケットへ納めてしまつたのです。無論下車する様子もまだありませんし、人への氣兼ねでもなし、ましてや私の咳が今氣の付いた譯でもないのです。眼に見えない何かにひかれたのか、これが思念の力とでも言ふのでしうか、心の中で懸命に念じた念佛がそんなにまで相手の態度を變らせる譯もないのでしうか、只私は思はずハツとしました。御十念を心に念じた途端、今迄人に迷惑を掛けていた事を止めてくれたという事が不思議と言えは不思議で、私は誰れにも知れず只有難く眼には見えなくとも御佛に心の中で合掌をしたのでした。

型をかの子に見出します。かの子は單に觀音像を捨離したのではなく、既に自らの中に攝取し自分のものにこなし切り色も香もある牡丹觀音に成長させて行つたことを思へばこの言葉も決して誇張ではないでせう。

ジレンマ

觀念と手仕事と二つを持つ娘さん。
祈禱しながら美に酔ふつて？
他人の二倍を持つ故なのだよ、
お堪えなさい、ふくらむまでね。

胸の中で二つの珠がかちあつてゐるつて？
馴れる迄は仕方がないわ
だから、觸れないやうに離れさせて
お堪えなさい、ふくらむまでね。

お前を雲の上で待つてゐる人は
二人もあるといふことを誇るのサ、
それは觀音様とミューズの女神。
お堪えなさい、ふくらむまでね。

昭和二十四年四月、小平の林にて

現代人と死

佐藤賢順

昨年ソ連から引揚げてきた青年が、つい四五日前、尋ねてきて、いろいろとあちらの現状を話してくれた。みな恐ろしい話ばかりで、戦争中のわが國の軍部獨裁に幾つかの輪をかけたような獨裁政治の現實を聞かされて、身振いしたのであるが、その青年は、話題を轉じて、こんなことを言つていた。

——澤山の戦友があとからあとから死んでゆくのです、過勞や榮養失調で凡そ部隊の三分の一も死んでいつたでしようか。自分も明日にも死ぬかもしれない。荒涼とした曠野の只中に、天井もない粗末な板圍いの馬小屋みたいな收容所を作つて、そこに寝起きして、毎朝薄暗いうちに出かけて、一日中働かされる。仕事のノルマに達するのには、力に餘る激しい勞働をしなければならぬのです。日暮れになつてヘトヘトに疲れて歸つてきて、ろくな物も食わずに、材木が倒れるように寝てしまう。ふと、このまま自分も死んでしまうのではないかと思う、きのう、おととい死んだ戦友の誰れ彼れのように……。しかし死ぬことなんか何ともないんです。こわくも恐しくもない。ここに倒れたまま呼吸が絶えてしまふに違いないが、別に何の感傷も湧

かない。神に頼る氣持も起らない、佛の慈悲にすがろうという氣も起きない。神も佛もいらぬのです。このまま死んでいかれるのです。自分ばかりではありません。みんなそんな氣になつてゐるのです。ああいう死の受け取り方があるのだと、この頃になつてあの心境を反省してはいます。さういう心境は、どこか原始佛敎の諦觀に似た所はないでしようか。——

この青年は幼少から佛敎の信仰の厚い家庭に育ち、佛敎の大學に學び、卒業間ぎわに動員されていつた學徒である。この青年の言うように、原始佛敎の灰身滅智（けしんめつち）には、こうした虚無的な所が確かにある。しかし後に發達した一切皆空觀の空の思想が、ただの空虚、虚無でなくて、むしろ全くその逆であることを考え合せても、佛敎はこうした諦（あきらめ）でないことが察せられよう。死に無感覺になることは、食う物も食わされずに、ただ牛馬の如く材木の如く働かされるために、すべての感覺や慾望が磨り減つて、生きようとする執着さえなくなつてゐることにもよるのであらう。

私は前月號で實存主義の死の受け取り方を書いて、實存主義者のうちには、人間が一死えの存在であることを取り上げ、人間は死において虚無の深淵に臨んでゐるに拘らず、日常的にはこの死えの存在から全く一すり落ちてゐる故に、決斷、覺悟によつて、眞正面から死を引き受けねばならぬ、と説いてゐる人のあることを紹介した。これは神によらない死の解決の仕方、近世知性主義の一つの方向が顯著にここに現れてゐる。

それに似た現代人の生死觀の一つに觸れる機會がまた私に恵まれた。それはやはり近頃のことであるが、或る會合で、共產主義の優れた理論家といわゆるその同志の數名とを招いて、對談をする機會が與えられたことである。對論は長時間に及んで、論議の内容は多岐多端で、いつ果てるとも思われなかつたのであるが、そのなかから、いま差當り必要な點だけを拾ひ出してみる。

いまの共產主義は、廣く愛されたいためという政策的な意圖が多分に含まれてゐるからであらうが、私どもが學生時代に聞知したそれとは全く相貌を異にして、科學主義的唯物論的形式主義の嚴密を、當りを軟らかくするために、ヒューマニズムとか、主體性とか魂と魂との觸れ合いとか愛とかいうようなロマンティックな理想主義のオブライトでふんわり包んで、誰れの口にも飲み易いようにしてゐる。であるから昔の共產主義のように、マルクスの「宗教は抑壓せられたる生き物の嘆息である」とか「民衆のため」の阿片であるとかいう言葉を眞向うから振りかざしたり存在が意識を反映し下部構造が上部構造(イデオロギー等)を決定する、というふうな一方的な主張だけをするような野暮なまねはしない。精神は物質が最も高度に發達した段

階において生れるものであるから、われわれは精神を最も尊重し、その働きを高く評價するといふ。従つて物質が精神に働きかけると同じように、精神が物質に働きかけることも認める。しかし全體として長い歴史をみれば、やはり根本的には物質が精神に働きかけ、これを決定する、といふのである。

そこで宗教に對しても暴力で斷壓したり理論的に否定したりする態度をとらないで、放つておく。宗教などにかかわりあつてゐるよりは社會組織そのものの變革の方が先で完全な共產社會ができれば、宗教は自然と消えてしまふ、といふ。搾取されたり抑壓されたりする階級がなくなれば宗教も自ずから消え失せるといふのである。しかし社會が變革されて消え失せる宗教は、一定の歴史的社會に屬する教團とか宗派とかいふ形の宗教で、人間性の奥底に根を張つてゐる宗教ではない。死を乗り越えて永生を求めようとする願ひは、いかなる社會になつてもなくならない。たとえ共產主義のいう理想の社會が出来て、富の公平な分配や教育や娛樂の機會均等が實現されて、物質的・感覺的欲望がすべて満たされ、何不自由のない社會が實現されたとしても(そんな社會が實現されるはずはないが、假にそうなつたとしても)それで宗教がなくなるとは考えられない。欲望は一つが満たされても更にその次その次と新たな欲望が起きて果しがたい。人間に死のある限り、それ乗り越えて永生を勝ち得ようとする欲求がある。ここに死の不安があり、恐怖があり、それが宗教である。それこそ、ヘーゲルとマルクスの橋渡しをしたフョイエルバッハが言つてゐるように、「死がなければ宗教はないであらう」。私は以上のやうな疑問を呈出した。

これに對する答えは次のようであつた——完全な社會が出来上れば、醫學は進歩するし治療設備は行き渡るし、病氣は少なくなつて、病氣にかかつてもそのために死ぬということが殆んどなくなる。人間には自然死ということがあるだけになる。長壽を保ち老衰して死ぬ自然死だけになる。そうなると、老衰して死ぬのであるから、すべての欲望が枯れきつて、生きたいという欲望さえもなくなる。従つて死の恐怖というようなこともなくなるのださうである。自然死に死の恐怖がないということは確かに言えるであらう。

けれどもそういう社會ができたとしても、老衰して生存慾さえもなくなるまで、死を考えないということはありません。ないし、また實際は病氣でなく災害などで生命を落す場合もありうるのであるから、死の不安がなくなるとは考えられない。——この疑問に對する彼等の答えは次のようである。

勿論、共產社會建設の途上で惜しくも挫折することもある。しかしわれわれは、實存主義者が考えているように、單獨者として死に對し死を受け取るのではない。われわれは社會大衆のためによい社會の一日も早く實現するように挺身して闘争しているのだ。自分の生命は社會大衆に捧げた生命である。それが大衆のために役立つとすれば、死んでも決して惜しいことはないし、死の不安とか恐怖とかは少しも感じない。

こうなると話はだいぶ違つてくる。ここまでくると一種の信仰であり宗教である。理想社會建設のための壯烈な死を夢想する熱狂的信仰である。佛教にもこれとよく似た境涯があることは、ここにわざわざ取り擧げるまでもない。

私を捨てて無我に徹した人の日常は、全く他人のために大衆のために捧げた生活で、何を畏ることもなく誰れに憚ることもない。恐怖は私を守ろうとするから起きる。私の貪りのないところに恐怖はない。『大道無門、千差路あり。この關を透得せば、乾坤に獨歩せん。』と無門和尚が言つたように、無に徹して私を去つた者は、天地狹しと濶歩することができる。共產主義の實踐は、先に語つたようなものであるとすれば、一見したところ、それは宗教の實踐と殆んど變らないようである。だが果してさうであらうか。私はもう一度、欲望の問題を取り上げて、この點を省察してみよう。唯物論的實踐は、宗教の實踐のように、自我の欲望の否定ではなく、その反對に、あくまでもその肯定であり、要求の主張である。従つて唯物論的實踐は自我を擴大するための闘争であり、それを妨げるものの破壊であり、またさうならざるを得ない。共產主義でも愛を説くがそれは宗教の愛のように、自己否定によつて現れる愛ではなく、利益を前提とする愛である。愛の前に愛の利益連關ということが先行しなければならぬという。つまり、愛したつてこつちの徳にならない者を、愛しても仕方がないというのである。名は同じ實踐でも、唯物論的實踐は自我の上に立つた實踐であるし、宗教の（特に佛教の）實踐は何歩も何十歩も深く自我の否定の中え斬り込んでいるのであるから、この兩者は全くあい容れない性質のものである。

實存主義と唯物論的思想とは、現代における代表的なテーゼとアンテーテーゼとをなしている。私はいまその兩方の生死觀を覗いてみた。では、淨土教ではこれについてどう教えているであらうか。（未完）

斷片

高瀬、磯

後ろ姿

男でも、女でも、後ろ姿の良い人は好ましい。人に對する憎惡も、愛情も眞つ正面からより寧ろ背後へ浴びせるものであるから――

容貌の美醜は生れつきのもので何とも致し方ないが、着付の衿元と肩の形、後ろ姿などによつてその人の品性の良し惡しを表現している。併し、自分の後ろ姿は自分には完全に見えないので、何か、後ろの方へ他人の眼を意識して歩くとき、肩を張つて不自然な形になり易い。意識してでも無意識であつても肩にくせのある人は下品に感じられる。難かしいかな――。

役者が後ろ向きで觀客を泣かすことができようになつたら、それこそ眞の名優と言えよう――。

先年、ある温泉宿で隣室の泊り客が、裸體になつても品がいい、お湯には入りかたが行儀よくもの靜かだと夫が感心して宿の女中に

どう云う身分の方かと訊ねたら東京で有名なお茶の先生です――と云う返事だつたので、成る程と合點がいつた。

茶道と云う藝術が、さびが肉體まで沁み透つて、その人自體が既に完成され藝術化されたのである。

アプフウブ

私の現居住地〇〇縣も御多分にもれず、戰後のインフレの渦に巻きこまれ、大小の俄成金がそこら中に續出した。ミカンを一と多に何百萬圓賣り上げた――お茶で御殿が建つた――いや、矢張り大きいのは紙の會社だ、その證據に脱税の罰金を何億と徴收されてもびくともしないではないか――いやいやそれより仕事が簡單で利益率の良いのは紙の原料屋だ――なる程、それはポロ儲けか――。

事實、全国各地から集荷した屑紙を女工に

マスクもかけさせないで各種に選別させ製紙會社へ納入する商賣はなか／＼儲るらしく、僅か一二年の間に莫大な財産を造り上げている。他人の棄てた屑の中から黄金を堀り出す商賣――世間では汚い仕事程、儲けが良いと羨み半分噂さする。

私は、精神分析學の始祖、ジグムント・フロイドの――他の諸學問がアプフウブ（屑）として棄てたものゝ中から分析は眞理の黄金を探し出す――と云う言葉を想い浮べた。これは自ら精神界の清掃を心ざして、肉體の醫者から精神の醫者へ轉向したフロイドが、當時の學界及び一般から強い抵抗を受けながら人間の靈性（理性）的自己中心説を覆してエス（本能的無意識）が中核であることを明らかにした心理學的革命者としてのスローガンである。私は、この短い言葉の中に汲んでも盡きない人間眞理の「泉」を見出し出している。

その昔宗祖法然上人は、善人往生す。いわんや惡人をや。とのたまわせられた。謂は人

間の屑である悪人にも猶救いの道の閉されて
いないことを示されたが、このみ教えは當時
の荒んだ人々の心にどれ程温く、どれほど有
り難く感受されたであらうか。上人は惡に身
を落しそれを悟り（自己の劣等感や不満を獨
斷的、主觀的、氣休め的に）としていた人達
に本當の健康な生命の統一を與え給うたので
ある。

所詮、人間は自分より偉大なもの、高い何
ものかに依存しなければ生きてゆくことは出
來ない。それは肉親間の生の愛情から發達し
成長して社會のあらゆる方面へ外向し、更に
醇化してその性向によつて人間の文化的所産
である科學、哲學、宗教、藝術のいづれかに
心の依りどころを見出して生きてゆく。文化
的行爲は心理現象に異ならず、心理現象は人
間の生命力の昇華したものに多ならないが、
いづれにせよ其の道にふみこんでゆく者は先
づ精神が健康でなければならぬ。科學的に
言うならば、超自我、自我、エスの三ツが各
々病的過重に陥らずよく均衡を保ち得てこそ
生命の根から世にも美しい知能や感情の花は
咲き出する。

餘 裕

町田トシコ

兩隣り、雛を飼ひ兎を育ふ

われ、花を植え、猫を飼ひ

おのおのに豊かさの蘇り來て

おもしろや

雛と小兎一つ籠に在り

朝日を浴びて草をはみパンをかじる

わが猫は夕となれば鈴鳴らし

いとも貧しき庭邊に

年々來るがまと遊ぶも

おのおのに蘇り來る豊かさや。

枇杷熟れて

竹 原 教 圓

庫裡のうらに四五本の大きな枇杷の木があ
る。熟れた實を鳥がつく。

沙彌もろ手ふりあげ枇杷の鳥追ふ

子供を馬鹿にしてか、なか／＼逃げない。少
し離れた所から追う沙彌を尻目にはゝたきな
がら、盛んにつく。沙彌は飛び上るように
もろ手をふりあげ、大聲をあげる。しつこい
鳥もこう追いたてられては居たゝまらず、一
羽がたてば二羽三羽とつゞいてたち、中には
それだけでもなほ枇杷をくわえてゆく執念なの
もいる。鳥の落した枇杷黠々。墓山の椎の木
に逃げた鳥五六羽、ガーガーと嘲りなく。

こんな大きな良う熟れたのを落していたよ
と沙彌は拾つた枇杷を頬ぼりながら、なほい
くつかを片手にかゝえて來た。

和尚さん、今日は、結構なお天氣です。何
ときれいにすだれていますこと、今日は随分
値もようございます。是非お頒け下さい。

と、町の小商ひをするおばさんが枇杷を買い
に來る。沙彌に枇杷を賣るかと問へば、沙彌
は頭を横にふる。

死の追放

中村康隆

いつかはやがて死すべきさだめではあるが生きてある限り激しい生の欲求に動かされ生の繁榮を目指して人はその日々を營爲する。

それが脆ければ脆いほどなおその生に執着するのが私達人間の常である。日々の生の忙がわしい営みに没頭して、敢えてその避けがたい實相から自らの眼を覆い、時折に出會うあの暗い場面を何か餘所事のように強いて思いなし、少くともそれは自分にだけはまだ縁遠い出来事だと自らに言い聞かせる。人は死ぬかも知れない、しかし自分丈はまだまだ死なない。いや桑原桑原、そのような暗い想いは心の片隅にもとめてはよくないと、拂いのけようとする。こうして人はその生の行手にいつ待ち受けているかも知れぬ運命——それは結局は自分を巻き込んでしまうではあろうが、しかし今はまだ、そして明日もまた、いな當分は決して自分には起らないであろうと、思い込ませているのである。そうして窮極に於て人は死を越えた自分の生の繼續を乞い求める。死は醜く恐ろしい。そしてそれは避けがたい事實であるが故に、一層忌まわしい。けれどもひとたびそれを我が身に即した、又は我が身に親しい者についての事柄とする時死によつても減ひざる生を願わざるを得ない。「死んでも命のある

ように」とは、率直な萬人の希求であらう。

こうして死は追放すべく而も遂に追放し能わぬ時には死を超越した永遠の生と死よりの復活とが乞い求められるのである。

このような心的傾向は死者の祭祀に於てもよく認められているところである。アンカーマンはその「自然民族の宗教」なる論文に於て「生者の死者に對する關係は二つの形式に於て現われる。即ち一方では死體への恐怖に基づいており、他方では親縁關係を墓場の彼方までも繼續することである」と述べている。

しかし、こうした傾向は、單に決定的な事實としての死との對決に於て現われる許りではない。死は單に終末の不可回避的な出来事であるだけでなく、それは常にあらゆる機會に於て我々の生を脅かす暗い影なのである。まことに死は、一日の終りに何時となく忍び寄りそうして凡ての野を山を村を町を覆い盡くす夜の闇のようなものであり。また思わざる時に襲いかかる餌物を見つけた禽猛の爪のようなものでもあらう。「河のはやく流れてゆいてかえらざることく人のいのちもまたかくのごとし。逝くものはかえることなし。齡千年なりといえどもついには死して過ぎざる」(中本起經)「わき目

もふらず華をつみ集むるかかる人をば死はともない去る。まこと眠りおちたる村をおしながす暴流のごとく」(法句經)と聖典には説かれてある。けれどもそれはまた、ふいと人の心をかすめさる想いのようなものでもある。雲の影の何時動いて我が立つ足場を暗くするか分らぬようなものでもある。「すべての人、死に赴き、死に向い、死のためにつながるなり。このうれい、人の世には免るることなし」(出曜經)と佛の説きたまえるように、死の不安は機會ある毎に人々の心を脅かすことであろう。我々の生が死の深淵にさしかけられたる存在であるが故に、それは時にふれ、折にふれてその姿をあらわにするのである。見まいとし聞くまいとしても、死の影は時折に人の心を冷たくする。

冬から春へ、春から夏へ、夏から秋へといった多くの季節的な移り變り目、命名・七五三・厄年・成年・婚姻・老病といった人間の生の區切り區切り、更には戦争・飢饉・疫病といった社會的な不安變動、さては精神的道德的な苦惱、こうした種々な場面に際會して人々は自らにさし迫る暗い影を感じる。日常の生の営みに於ては、遂に解し切れぬ死の不安を感じる。就中、直截に生命を脅かす自然的及び肉體的な過渡期と社會的動搖の時に於て、殊にあまねく人々は生の危機を感じる。そして多くの除災招福特に厄拂いの儀禮を執り行うのである。歳の瀬の厄落し、年越しの鬼やらい、三月の流し難、五月の菖蒲湯、六月と十二月の大祓い、七月のねふた流し、虫送り等々、これらは何れもみな直截に生を脅かす死の災厄を祓除し乃至その忌穢を拂淨する意味合いで行われるものである。いな、單に斯様な季節的な移り變りに行わるる過渡儀禮のみならず凡ゆる宗教的儀禮は皆直截に生命の危機に於ける死の不安の感受性

の上に鋭く根差すものなるが故に、それは凡て死の災厄を追拂い生の歡びを招く機能果し、また従つて死と再生とのモチーフによつて構成された機構を有つているとさえ説かれもするのである。

それはともあれ、ヨーロッパの農民たちが春たちかえる頃久しく行つて來た所謂「死の追放」の儀禮も、こうした眼でみるとひどく我々に身近なことを知るであろう。復活祭を前後に寒くて暗い時期を送つて暖い太陽と花と青空とを仰ぐ歡びは、まして大陸らしい季節の風貌のゆえに殊に切ないものがある。そこにはまさしく死と生との對照があり、復活と再生の歡びの反映がある。死の追放、その追つ拂いとか運び出しとか呼ばれる儀禮は復活祭に先立つ四旬節の第四日曜、俗にいう死の日曜日に普通行われるが、處によつて一週間の遅速がありまた復活祭後の最初の日曜に行ふ處もあるという具合にまちまちで一律的ではない。グリムは起原的には三月を一年の初めとした古代スラヴ人の間の新年の祭だつたと考えた。

南獨バヴァリアの中部フランケン地方では、四旬齋の第四日曜日に村の腕白小僧どもが死をあらわす藥人形をこしらえ道化騒ぎをしながら街を昇ぎ廻り村境の向う迄行つて焼棄する。ニュルンベルグでは、少女たちが經帷子で覆つた人形を納めた小さな無蓋の棺を昇いで街々を通つて行く。他の一組は林檎を頭にした櫻の枝を無蓋の箱に入れて持つて行く。そして「我等は死を流れに投ず、めでたし」などと歌う。中獨チューリンゲンの村々では藥などでこしらえた死の人形を池や河に投げこむ。「いざ死を村からかつぎ出し、春を村に迎え入れん」云々とも歌う。ボヘミアの或地方では死の藥人形を子供たちが村境までかついで行つて焼きながら「さて死を村から送り出し、初夏を村に招き込む。ようこそ夏さんようこそ緑のお麥さん」

などと歌う或はまた焼く前に「我等村から死を追出し、新しき年を村に招きこむ。懐しき春よようこそおいで、緑の草よ、ようこそおいで」と歌い、戻りには「我等死を追出し、命を招き返したり。彼我等の村に住いを定めたり、されば懐しき歌を歌わん」と歌うところもある。こうした春や夏の迎え入れが單に歌だけでなく、森の若木で飾り人形を作つて持歸る形で示されることもある。ポヘミアではそれをリト(夏)と呼んでいる。中歐シレジアでは夏、五月、または花嫁とも云い、ポーランド人地區ではヅチエワンナ即ち春の女神と呼ばれる。ここでは死は投捨てられる人形によつて、夏又は命は持歸られる樹枝によつて表わされているが、時には死の人形そのものに生命の新たな力が歸せられ一種の復活によつて一般的な甦りの器となるかに見える場合もある。その場合の追放は多く葬禮乃至埋葬の形式で行われ、シレジアでは「死の埋草」と呼んでいるが、これは謝肉祭に行われる類似の儀禮がカーニバルの埋葬と呼ばれるのに準ずるものであり、埋葬は河への投込又は特定地點への埋没によつてなされ時には人形の破棄を伴うのが例であるが、單純な埋葬で甦りを伴ふものもある。また時には夏と冬の決闘という劇的表現でこうした死と復活のモチーフを示す例もある。そこには死に對する恐れ忌み嫌いとその死を喜ぶ感情があり、又反對に死への悲嘆と愛情尊敬という相反する態度も認められることを、フレイザー卿は説いている。

いずれにせよ、こうした「死の追放」によつてヨーロッパの農民たちはその年の疾病や疫病といった死の影を伴う災厄を追拂い、豊饒と繁榮とを齎すものと信じているのである。それは丁度我々の民俗に見られる神送り、人形送りの形式での祓除の諸儀禮と共通している。疫神流しや蟲送りといった類である。主に七夕流しの頃行われる虫送り(越後では蟲神送りと呼ぶ)の風習が以前は弘く行われていたことは、今も蟲送場、蟲送山といった地名が到る處にあるこ

とからも想像出来るが、村を接した土地では村境までしか送らぬので、次の村も急いでまた送り、結局は海や川に流し又は山の中などに送り込むのだが、それが出来ぬところでは特定の所に埋めて祭つたので其名残が多く、蟲塚供養塚に残つていたのである。蟲送りは共通の様式が見られ、藥の人形を行列の中心にするもの、人形の藥を苞にして食物を充す例、害蟲を籠に入れ又は葉に包んで人形に持たす場合等がある。蟲害は怨靈の祟りからとして實盛などと呼ぶ例も多い。廣島縣山縣郡新庄村地方では七月初め神社の境内に齋藤別當實盛と呼ぶ馬乗り姿の藥人形を作り男子數十人でそれを廻つて踊り次には村の辻々で最後には村境で踊つて人形を河に流す。佐世保附近では八尺から一丈までの人形の顔を赤く塗り庄屋から庄屋へと運び柚木から大野を経て相浦の實盛谷に納めるが、庄屋を立つ時には「齋藤別當實盛様のごえんだち、蟲諸共に御供に、後は榮えて富貴繁昌」と歌う。大正六年九月石垣島に發生したスル、虫慘害の際には御嶽に驅除を祈願し芭蕉葉や蒲葵葉で作つた舟形に四五匹害蟲を乗せて海に流した後で一同砂上に熟睡の態をし一人が鶏鳴をまねるのを合圖に一齊に驚起して結願としたという。

ここにも追放と復活のモチーフが認められ、また全體として、除災招福の祈念がよく滲み出ていることを知る。そうしてまた石垣島の例のように、毎年の定まつた行事でなくとも、それが我々の生命の危機として感ぜられる場合には、こうした儀禮が営まれることを知るのである。まことに宗教は生命の危機そのものと直結している。除災も招福も不死と永生の希い以外ではない。蟲送りが念佛で送られる例も多いが、私たちの農民はこうした願が實に佛の恩寵によつて達せられることを知つていたのである。まことに佛の慈光を浴びる時にのみ死の影もそのまま生の歡びと轉化し、死生を超えた高い境地に達することが出来る。

死 と 俗 信

吉 田 宣 成

都會では、物ごとを、とかく小むづかしく考へがちです。「死」とゆふことも、とやかく

問題にはされてはゐますものゝ、やゝもすれば、一般には通じようもない。哲學風の論議に陥りがちのようです。がさて、そうゆふしかつめらしい問答はさて置いて、こゝではとくに、山村・漁村・農村等に働く素朴な民衆が、亡くなつた人々を、どのように考へ、どのように扱つてゐるか、その朴訥な人達の、ありのまゝの風俗習慣のうちから、二つ三つとりあげて行つてみたいと思ひます。

一、死者を怖れる風習

死ぬ、とゆふことが、たとへ醫學的な常識のある人にとつて、一應道理づけられ、納得がゆくとしても、人情の上からは、やはりおごそかな、かなしむべき事柄とされるに相違ないでせう。ましてや、あけくれ自然を友とする、片田舎に住みなれ、新しい考へ方や生き方に觸れることの、極めて希れな人々にとつては、嚴肅とか、悲哀とかゆふ氣持以上に、人の死は、うす氣味の悪い、何とも言葉では現はせない、怖しさにつゝまれた出來ごとゝして感ぜられるのは、至極もつともなことなのです。しかも喪や忌みの明ける頃までは特にその感じが強いのです。さうゆふ心持の現はされてゐる風習として、つぎのやうな代表的なものがあります。

その一つは、納棺の際に、死者を縄でがんじがらめに締めくゝつてしまふとゆふのです。例へば石川縣下の遊泉寺とゆふところでは、死體を丸裸にして、棧俵の上にあぐらをかゝせ、その上から不淨繩とよばれる縄で、たてよこ十文字に、腕が體へめり込むほどに固く締めくゝるのださうです。

さらにかうゆふのもあります。それは鳥取縣下の津井村の人の話によりますと、その地方では、いちど亡くなつた人が、生きかへつ

て來ることを、ひどく忌み嫌ふさうで、若しも生きかへりさうになつた時には、手早く箒で叩き、死なせて終はなければならぬさうです。

われ／＼からみれば、どつちもずい分むごたらしい扱ひではありませんか。しかしお氣付のやうに、いずれも死者を忌み怖れる心持から出た、極端な場合の行爲なのです。つまり一方は、埋葬してから死者が、二度とこの世に舞ひもどつて來ないやうにとの願ひからですし、他方はやはり、生き戻つて來て害を及ぼさぬやう、完全に息の根を止めてしまおうとゆふ用心からなのです。そう云へば、地下に死體を埋め、さらにその上に重い石塔をのせるとゆふ墓地のやり方にしても、今では當りまえのやうに考へられ、いろ／＼に工夫して、石碑にもあれこれと、念入りの趣向をこらしてゐるやうですが、もとを尋ねてみれば、死者を忌み怖るゝ餘り、地下に埋め、それでも安心がゆかず、念の爲重しをのせて、這ひ出して來ることを防ぐとゆふ人情がさうしたのだと云はれてゐます。さらにところによつては、死者生前の衣類や器具類を壞して捨てたり、焼き拂つたり、或ひは川や海へ流したりする風習もあつて、これも明かに死者

に對する忌みであり、怖れからで、さうすることによつて、死そのものゝ忌わしさ怖しさを、祓ひ淨める意味ともなるのです。

かうゆうたぐひの様な風習を比較してみますと、死んだ時を境にして、いまはのきわ迄の遺族たちの悲しみは、急速に薄れて行つて、むしろ怖しい、けがららしいとゆふ感じの方が、追々強くなつて来る心の移りゆきをうかゞふことが出来ます。そして亡くなつた者は、一時も早く葬らなくてはいけないとゆふ心持が、死者葬送のとりどりの行爲の中に現はれてゐます。例へば、人が死ぬと、北枕西向きにさせるとゆふことは、全國一般に行はれてゐる共通のしきたりですが、これも地方では、息を引きとつたら、ぐず／＼してゐないで、「直ちに」さうしなければいけないとされてゐるやうですし、またこの時、枕メシとか枕ダンゴを供へるところもありますが、これも大急ぎで作るので、ハヤオゴク（早お御供）とか、ジキノメシ（直きの飯）とか、またハヤダンゴなどゝ云つてゐる位です。

さて、自然死の者でさえ、これほど忌み怖れられてゐるのですから、悶死・惨死・自殺死など、つまり變死した者に對しては、一體どうだつたでせう。自然死をした人なら、後

でお話ししますやうに、だん／＼と月日が経つにつれて、忌み怖れてゐた氣持が遠のいて行つて、次第に生前にも増して、死者をいとはしむ心が湧いて來て、ねんごろに追慕し供養する營みへと深められて行くのですが、變死者の場合は、何時々々までもその祟りとゆふことが心の奥に、怖れの感じとなつてわだかまつてゐるので、表むきには、妄念や怨念の御氣嫌をうかゞふと云ふ仕かたが現れ、慰藉して成佛をうながすことが、唯一の營みとなる譯です。ですから、よほど大昔に死んだ人でも、いまだにあちらこちらで忌み怖れられて、奇妙な俗信が數多くあります。典型的な例をあげてみますと。

和歌山縣下の龍神村大字龍神は、昔から温泉地として有名ですが、こゝにはまた、男が早死する村だといふ俗信が、古くより傳へられてゐます。それにはかうゆふ昔がたりがあるのです。その昔、一人の熊野詣りの尼さんがあつて、或る日この村へ來て宿をとつたのですが、その宿の主人が、その尼さんの持つてゐた大金に目をつけたのが、そも／＼事の始りなのです。元來が強慾な主人は、むら／＼と惡心をおこし、二三人の仲間と謀り、夜中にうまく鶏を鳴かせて、もう夜明けが近

いとだましたので、例の尼さんは急いで旅仕度をととのえて宿を立つて行つたのです。ところが、惡人たちは途中に先まわりをしてゐて、尼さんを殺し、その大金をまんまとせしめてしまつたのでした。併しむごい殺され方をした尼さんの、斷末の一念は恐いもので「永劫この村の男が妻に先立つて死にます様に」とゆふ咀ひとなつて祟つてしまつたのです。おそろしや、その後今に至るまで、その村では夫は早死し、やもめ暮しの世帯が通例となつてゐるさうです。しかもたび／＼村人は、尼さんの怨念をしづめる爲に、小さな祠を立て、ねんごろに菩提を弔つたさうですが深い祟りは一向に止まぬとのことでした。

そのほか、惡靈・怨靈などのたぐひはなか／＼多く、よく因縁が祟る、因果が報ひるとか云つて、つねづね村人は怖れてゐるやうです。だが、かうした惡靈のみにかぎらず、村の人々によつては、死者が成佛したかどうか、ずいぶん氣にされ、すこしでも家庭に災厄があると、ミコやイチコにたのんで、先祖の靈が、不遇な抜ひを受け、不自由な目に遇つてゐるやあしないかと、うかゞひを立て、貰つてゐることは、たび／＼見聞きすることです。そして、このやうに死者に對して、あ

ゝでもない、こうでもないと氣を配る心持、そこにはすでに、忌み怖れる氣持にも増して追々に死者をいとほしみ、なつかしむ心が廣くなつて來てゐると云へるでせう。

二、死者をいたわる風習

人が亡くなつた當座は、忌み怖しがる氣持が強いと云つても、それだけにつきるものではないのです。忌み怖れる心の片すみには、死者を思ひやる氣持も、なか／＼ゆきとゞいたものがあります。何故なら、死者に思ひやりをこめた、こんなほゝえましい風習があるからです。

その一つ、山梨縣下の或る村では、盆にはお精靈さまが、あの世からはるばる我が家へかへつて來るものと信じ、盆の直前に死亡した新佛には、頭にハリツコ（紙を張つた箆）を被せて葬つてやる習はしがある。これはつまり、あの世からぞろ／＼かへつて來るお精靈さまに、新佛が途中で出逢ふと、「おれ達ばかりして盆でかへつて來るのに、今ごろお前さんは往くのかい」と云ひながら、先輩のお精靈さま達が一つづゝ新佛の頭をなぐるからださうです。

もう一つは、やゝ昔の話ですが、尾張の熱田町では、人が亡くなると「異國にて道の關

守り、言問はゞ、熱田の宮の者と答へよ」と云ふ神詠を紙片に書きとめて、棺に入れて葬つたと云はれてゐます。

むろんこんな特別な例をあげるまでもなく水の乏しいあの世のことを氣づかつて、死者に水代錢を持たせてやつたり、頭陀袋の中へ辨當だといつて、握飯に山椒の葉、赤味噌、粉糠などを入れてやつたり、或ひは墓参りして水を手向ける時、器の中へ葉を浮かせて、死者が川とまちがえないやうにしてやつたりこんな思ひやりは數へ切れぬほどに多いのです。

このやうに、忌み怖れる心のうちにも、何くれとなく、こまかい點に死者をいたはり庇ふ人情がちみ出てゐるのです。そして喪があけ、忌みもあけて來る頃には、遺族達の氣持も、毎日の生活も平常通りに戻り、一段落がついたと云ふ安心感が湧いて來ます。所によつて、幾分づゝの違ひはあるでせうが、大體一般のしきたりでは、七々四十九日の満了を以て精進上げの期限とし、この時をまた忌み明けとしてゐるやうです。まあ五十日も経つてみれば、人々の心にも餘裕が出來、しみじみと死んで行つた人の、生前のかず／＼の思ひ出などを語り合ひ、あゝもしてやればよ

かつた、こうもしてやれば喜んだものと、至らなかつた點に、ます／＼哀悼の情は深められてゆくこととせう。それが月忌・年忌・彼岸・盆とゆふ、時を定めての葬事に、改まつたかたちで忠實に營まれ、年久しく故人を弔ふ風習となつて行くのです。かような、故人をいつくしみ、なつかしむ心の、そのおく底には、亡くなつた人々をも、生きてゐる家族と共に、やはり家庭の一員としてみてゆくとする人情が働いてゐる譯です。

こうして私共は、村人の風習のうちに、死の直後忌み怖れる心持の勝つてゐたのが、月日の經つにつれ、いたはりいとほしむ人情へと次第に深められてゆく、心の移り行きをはつきり讀みとることができるのです。そして死者に對して、忌み嫌ふ氣持と、氣づかひいたわる氣持、こんな複雑な人情によつてあざなはれた風習、こうした地方にありきたりの風俗習慣のうちからも、死に對するさゝやかな解答が得られるのではないでせうか。

啄 木

今日もまた胸に痛みあり

死ぬならば

ふるさとに行きて死なむと思ふ

「悲しき玩具」より

佛を缺いた法

——淨土教の本質 第六講——

眞野正順

いままで述べてきたやうに、佛教は時代を経ると共に、佛陀について二つの對立した考へ方を生じて來ました。

さて、これはどうした事であらうか。いろ／＼な事情はあるとしても、とにかく、こんな矛盾ができるのは、平たく云へば、それだけ佛陀の教の中に、どこか不完全なところがあるせいなのではないか。

しかし、實はこんな矛盾ではないのでありまして、一步深く佛教の信仰の内部に入つて味いますと、二つのものは、佛陀において實は一つでありまして、それが、かく二つに現れてくる事によつて佛教の佛教たる特長に更によく働き出してくるのであります。

念のためその事をもう少し申しておきましょう。

まづ「法」の方から考へて見ますと、佛教は極めて理性的な態度で現實に向つてゆくものでありまして、事實を事實として、そのあるがまゝに分析してゆく。その實證的な自然科学的態度は、宗教として他にほとんど類例を見ない程であ

ります。そしてその極、あらゆるものは、その個々の存在としては「無我」であり「無常」に過ぎないが、その根元においては實は互に融合して一如となつて揺れ輝いているものである事を見出すのであります。

この境地こそ、宇宙の最後眞實の姿であると共に、また、人間が人間として眞に生きるべき眞實の立場であります。佛教はこれに到達せんと努めるものであります。

されば、佛教は、この現實に正面から取組み、これを分析する事によつて、その奥に宗教的世界の嚴存するを見出すのでありまして、それは、宇宙の眞理なるが故に、また、ゆるがざる信念の憑りどころであると、雄々しく宣言するのであります。

これは、他面から見れば、佛陀の深邃なる内觀の境地は、たゞ瞑想の上に浮べられた觀念ではなく、現實世界の根底であり、一切の現象はこと／＼この境地に根ざされているものであるを見出すことでありまして、云はゞ、宗教的内觀――

「定」の境地を現實世界の上に伸ばし、その價值を現實の上に實證し、更に、それによつて現實を説明し、支配せんとするものでありまして、實に佛陀の磐石のごとき自信の強大なるを察知せしめるものであります。

この眞實一如の世界に來つて、人ははじめて永遠たるよろこびの生活に入ることが出来る。それが我が眞實なる本質の實現の世界に外ならぬからであります。然も、それは我が本質の實現であるから、こゝにある私を離れて別に遠くあるのではない。人はありのままの姿において、たゞちにこの世界に接續し、その内面に豊かに之れを湛えておる。

かの崇高なる佛陀といへ、やがてこれが完全なる實現に外ならぬのであつて、別に我々を離れて遠い異他なるものではない。ひとたび、この世界に目覺め來れば、自もなく他もなく、輝く大海の同じき波の一つであるわけでありましょう。

しかし、以上のことは悉く眞實であるに相違ないが、我々の現實が、たゞちに、その通りになつていると云ふ譯ではない。我々の現實はむしろその極端なる反對でありまして、頑く個我差別の姿に固執するのみならず、それを中心とするのでなければ一刻も生きてゆけない。そして鎖されたる自己を護つて、いたすらに争ひ、いたすらに悩み、いたすらに傷いて止むことはない。かゝる迷執を捨て、たゞちに眞實の生命に立ちかへるといふ事は、いかに望ましくあつても、所詮現實を遠く隔りすぎた理想であります。

されば、この様な淺ましい我々の現實の立場から云へば、かの溢るゝ豐麗なる眞如の世界は、たとい眞實であつても、たゞ、そうあるべき可能性として、これを想像している外いたし方ない。

このやうな眞實理想は、それがこの醜き現實を突破して、その眞實なるがままの姿を現すその顯現を、この我々の現實の眼において見、その豐麗さに愕くのではない限り、眞にそれに近接する事はできません。

それならば、果してこのやうな理想的實現は存するのであらうか。佛陀世尊が即ちそれであります。

佛教は、單に宇宙眞實の理法を確かめ得た故に偉大なのではない。かゝる眞實が、佛陀において實際に具現したが故に偉大なのである。繰返し來たやうに、佛陀は決して單なる理説を傳へる哲學者ではない。眞理を明らめたのみならず、身にそれを實現したが故に佛陀なのである。こゝに佛教が宗教として成立する最大の理由があります。

我々はかゝる理想の實現を、目前にする事によつてこそ惑ふことなく眞實の世界へと近づき行く事ができたのであります。

こゝにおいて、佛陀は、宇宙の眞實の相をその理想的發現において顯すものとして、かぎりなく永遠であり、出世間であり、偉いなる主體的自由において、盡くすることなく豐麗なる能力を發現するものとせらるゝは當然であります。即ち、

佛陀が、假我の相を破つて眞如の内容を顯現したといふ事は宇宙が、その内藏する限りなき富を、あたかも堰を切つた奔流のごとくに表出する姿に等しい。佛陀眞身の無比なる豊麗さは、實は、この宇宙人生そのものが、その眞實究極において永遠にして限りなく豊麗なることに基くのであります。

このやうに、佛は眞實の實現であるのみならず、更に眞實そのものとして絶えず一切のものを眞實の中へと引きよせ、ひき戻してゆく。迷へる者を眞實へ、窺乏せるものを喜びへと引きよせてゆく救済の力である。それは深い智慧であると共に、大いなる慈悲である。いはゆる、悲と智と圓滿せる佛として、眞の救済を可能ならしむるものであります。

しかし、この様に佛陀の永遠性とその超絶的に勝れたる部面をのみ考へてゆきますと、いつか感情に走つて知らず／＼現實から遊離した理性から外れた信仰となつてくる恐れがあります。そのために「佛」の信仰は絶えず「法」の原理に歸つて味はれ、この現實の中で人生を淨化してゆくのでなければなりません。

佛教の救ひは、ある種の宗教のごとく、何か人間とは異他なるものが、天上から降り來つて、人間をどうかししようと云ふのではない。かゝる異他なるものは、たとい其力が勝れていたとしても、眞に人間の本質にかゝり得るものではない。眞の救済とは、人間をしてその本質を實現せしむるものでなければならぬ。社會についても同様である。個人と社會

がともにその本質を全うする事に眞の幸福は存するのである。佛教の「法」はこれを示すところの原理である。

また、救ひは、人間より全く超絶せる異他なる者との間には眞には成立しない。救ひ救はれる者は、何時までも對立をつゞけて變らないからである。眞の永遠なる救ひは、逆へる者が眞實なるものに全く融合して永遠に一となる時がなければならぬ。かゝる眞實の融合は究極において佛と人との本性の一なるに基かねばならぬ。「法」はこれを示す原理であります。

このやうに、法は佛の信仰を眞に成立せしむる原理であり、また、それが歴史社會の生ける根底となるべき所以を示すものであります。それゆえ「佛」の信仰はまた、必ず「法」に歸つて來ねばなりません。

この様に、佛は法により、法は佛により、二面は互ひに背きつゝ互に不可缺たる双輪となつているのであります。

x

さて、以上、だいぶ冗長になつて恐縮ですが、佛と法の二面が成立して來たわけを御話しました。ところが、その後の佛教の發展にいつか、この兩者をそれ／＼一方に傾けつゝ二手に分れて發展せしめる事となりました。そして、本來相並んで存すべきものを「佛」の信仰を缺いてたゞ法のみ、法の原理を離れてたゞ「佛」のみとその勢ひ他を忘れるやうな悲しむべき傾をとつて參りました。

この事は一面から申せば、それ／＼の方面で著るしく發達した點もありますが、それだけ、全體として佛教は片よつた跛行的な姿に陥つて來たことはどうしても免れる事はできませんでした。

一法一の一面に傾いて行つた一潮流は如何なる發展の姿をとつたであらうか。こゝに詳しく述べる暇はありません。それこそ、あの厖大にして複雑な大乘佛教々理史の全面をこゝにくり展げなくてはならないからです。

しかし、たゞいまの場合、かういふ事だけ指摘しておきます。理論はいちじるしく現實に近づき、佛の能動性が、いよ／＼強く主張されて來たといふ事を。

即ち、かつての無我無常の發展したものであるとしての「空」の諦觀は、いちじるしく現實的となり、その「空」をも更に否定するところの「不空」として、嘗ての虛無性を全く脱離して、ふたゝび、このありのまゝなる生々たる現實世界に歸つて來ました。そしてかゝる諦觀の眼としての般若の智慧は、眞に生ける現實を見るものとして、煩惱を離れて佛道はなくこの娑婆世界に即して佛世界を見るに徹底し、やがて、この萬物の一々に残すところなく、隈なく佛光のやどるを見る、法華の一念三千、華嚴の事々無礙の理説を華やかに展開し出したことは、學者の常に語るところであります。

こゝに、萬物はそのさながらの姿のまゝに、互いに融通して止まぬ一如の世界相を畫き、それによつて、この醜き煩惱

の肉身を以て輝く佛覺の世界にいたり得る原理を示したのであります。即ち一法一の原理は、その極度にまで徹底されて參りました。

また、これと並行して、この教法そのものも、初めは、眞理を靜的に觀照する曇りなき智慧（淨慧及其の眷屬）とせられました。やがて更に能動的に、眞理そのものからの直接の表現（清淨法性界の等流）とせられ、更に遂に、眞如そのものが人格的に能動するを主張するに至り（法身說法）この現實世界の上に溢れかゝる佛原理の能動性はいよ／＼色濃く主張されて來ました。

このやうにして大乘佛教理説はその極致に達し、まばゆき佛光の光被するところ、あまねく一塵一草も残すことなく、一切と佛陀と一如に融合する生佛一如の救済が實現可能なることの原理は、遺憾なく徹底せられたのであります。

しかしながら、このやうな絢爛たる理論の樓閣を築きあげたその背後の現實生活はどうであるか。「佛」の信仰を遠ざけて、たゞ一法一においてのみ、佛教の目的を達せんとした事は、果して成功したのであらうか。

こゝに振返つて、我々は、かゝる誇らしき理論の齎したる宗教的結果の外にも不毛貧弱なるに吃驚するのであります。

芝園だより

◇七月、お中元と昔からゆうように、いよいよ一年の後半期の第一歩が始まる。お盆、お施餓鬼と、今月は私たちの生活の中で、佛教にふかくむすびついた時でもある。その點で私たちはこゝに人生の一大事をよく考えてみたい。

◇死の問題をいろいろの角度から説いていたゞいたのもその意味からで、むかしから宗教への大事な門がこゝにある。兩佐藤、中村氏は大正大學の教授、吉田君は敎學院の新進です。

◇綠蔭しづかに想えば私たちの周圍に渦まぐ様々の姿の中から、今月は特に女性の方々にそれぞれの随想を記して頂いた。村田さんは既におなじみの方、今月は劇壇にお忙しい中から、私たちもよく直面する車中感を取り上げて下さった。岩瀬久美子さんは女流文壇に著々進出されている作家、高瀬さんは貞恭婦人會で活躍された方で

す。

◇浄土の編集もどうやらスツキリしてきたと、之は他讃ですから。

八月號はグツと碎けた平易な信仰中心の讀物を満載します。内容は秘中の秘御期待下さい。(藤田)

◎七夕とたままつりのない七月は考えられない。都會はさほどでないが、それでもさすがに、都大路に白衣姿がチラホラする。ああ今年もお盆になつたのか、人々は時折り行き會う棚經僧から、ほのぼのと先祖のまつりを胸に浮べる。

◎佛教がわづかに生きているその片鱗。これだけにすがつていいのだろうか。もつと生活に根づいた、季節とか行事とかにかかわりなく躍動する昔の姿にかえることは出来ないだろうか。

◎私達は、浄土のすすむ道を、そのような方向にむけようと努力している。紺碧の大空に悠然と流れる雲の如くに、遠く、高い一點をめざして、佛教の明日の輝かしさを胸にひめて。(竹中)

◆庭先の青桐に梅雨が煙るやうに降りしきる。ひそつり閑とした編輯室で、後記の筆をとりつゝ思ふ。終戦後どこへ行つても見聞きする言葉に、大衆とか民衆ないし人民とゆふのがある。日常何氣なく聞き語り叫んでゐる言葉だが、ずいぶん漠然とした目の粗いさるみたいな言葉だと思ふ。曰く、民衆の爲に、曰く、人民よケツ起せよ。聞くは一時の恥と心を決め、去る日友人の若きマルキスト氏に教へを乞ふてみた。ところが、どうも明確な解答に値ひする定義はないらしい。働く人達とか、無産階級だとか、一向にピンとこない。なるほど民衆とゆふも、人民とゆふも、なか／＼むづかしい言葉だと思ふばかりだつた。

◆だが、むづかしいからといって民衆・人民をわからぬまゝにはしておけない。創刊以來、「大衆的な宗教雑誌！」と銘打つて來たわが「浄土」こそ、民衆人民をいち早くつかまねばならない。讀者と共に、目の細やかな大ざるを作つてあの人もこの人も、みんなをすくひあげて行こう。(吉田)

入會購讀御希望の方へ
會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「浄土」 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿四年 六月二十日印刷
昭和廿四年 七月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門
東京都千代田區神田區保町三ノ十

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京 八二一八七番
會員證號 B 一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共)

お盆の施本用とてし

半價提供

キリスト教の目ざましい進出の一因は洪水のように出る文書傳道です。
現代人は耳からよりは目から、感情によるよりは理性によつて信仰を求めます。
傳道の好機、お盆を間近にひかえ、大いに教勢擴張のために碎身して頂きたく、
各寺院の施本用として、中村氏の好著を破格の値段にておわかし致します。
部數に限りがありますから、期間中のみ特價の註文に應じます。

中村 辨康 著

法然上人とその信仰

菊半截・八〇頁

定價三十圓
特價十五圓

特價

一部十五圓

(送料二部まで六圓、但し十部以上の場合送料は送料は當方にて負擔、なほ代金は郵券にても可)

申込期間

七月末日 (期間後は定價に復す)

布教の彈丸！

傳道の糧食！

即時御申込み下さい

東京都港區芝公園五號地十

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番